



河内 東高野街道 が国の中心帰一に燃えた時代... **最終回**

# 湊川 —我ら使命を果たしたり—

正成は一族の命に代えて何を守ろうとしたのか？

副会頭 野瀬 泰良  
「輝くなにわ」編集委員長 (豊園経営者)

## 用いられなかった正成の作戦

時は正に風雲急を告げるであった。播磨の赤松の本城を攻める新田義貞(よしただ)率いる2万の官軍に数万の加勢が集まり来たって喜んだのも束の間、赤松円心にすっかり翻弄され、山城ひとつ落とせずに一ヶ月もの時を浪費したお蔭で、九州に敗走した足利勢がすっかり息を吹き替えし、今上陛下とは皇統を分かたれる持明院統の上皇様から將軍宣下を受け、京に幕府を開かんと、兄尊氏が海路を、弟直義(ただよし)が陸路を、中国四国九州の大軍を率いて攻め上って来たのである。

後醍醐天皇は急変する戦況報告をお受けになると、播磨の義貞に京への退却と、奥州多賀城の北畠顕家(あきいえ)に再度蝦夷(えみし 東北人)の大軍を率いての上京を命ずる急使を遣わされた。さらに公家たちには、この非常事態への緊急対応策を講じさせられた。皇都を警護するお役目にて、たまたま皇居内にいた楠木正成は、絶対絶命の天皇方を起死回生の勝利に導く策など思い浮かべるべくもない公家たちから頼りにされ、思うままに戦略を提言することが許された。

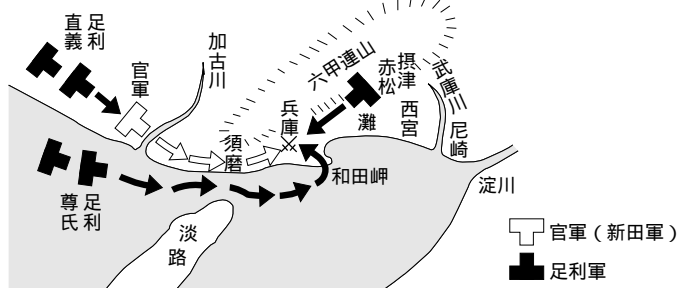
正成の提案は、天皇方が涙を呑んで足利が目のかたきにする新田氏とは手を切るのを条件に、足利氏に持明院統の皇室を持ち上げるのを諦めさせてはどうか、という公家たちには思いもつかない唐突なものだった。無論このような案を奏上できる肝が備わった公家など一人もいなかった。(「梅松論」)

仕方なく正成は第二案を提案する。それは、帝と公家の方々に再び叡山に避難していたとき、官軍は足利軍とは正面切って戦わず、足利軍を京の都に引き入れて消耗させた後にこれを攻めるといふ半年前に実験ずみの作戦であった。(「太平記」)

さすが兵法を知る者なりと感心した会議の取りまとめ役の坊門清忠は、さもそれを自身の考えのように帝に奏上した。

だが帝は会議の結論にいたくご機嫌を損ねられた。日頃穏やかな陛下には珍しく、感情のまま清忠を口汚く叱責なされ、次のごとく仰せられた。

「この大馬鹿者、そのような作戦は直義の大軍に追われ難儀する義貞が、尊氏の兵庫上陸までに須磨の隘路を通過し、無傷で畿内に戻れ得ての話であろう。もし尊氏が義貞の兵庫到着前に上陸したなら、いかに義貞であろうと前から後ろから足利兄弟の挟み撃ちにあっては全滅するしかない。良いか、今なすべきことは、2万の官軍を無傷で京に戻すことじゃ。誰でも良い。3千、いや2千、いや千の兵でもよい、今すぐ兵庫に遣わし、官軍が西宮を越えるまで、尊氏の上陸を阻止させるのじゃ。」



## 正成に尊氏の兵庫上陸阻止の命が下る

清忠は色を失い汗をふきふき、帝のもとを退出した。思わぬ陛下に叱責される原因をつかった正成を、清忠は逆に無性に腹立たしくなった。

(少しは兵法家と一目おいてきたが、とんだ食わせものじゃ。奴のため、この清忠の日頃の忠勤が無になったやもしれぬ。奴をこのままには捨ておけぬ。そうじゃ、奴を兵庫に行かせよう。奴らを賊の攻撃から、京に戻すべき官軍を守る盾たてとして使い捨ててやるのじゃ。)

泰山ビル株式会社  
西尾 寛一  
大阪府柏原市国分本町四六一〇  
TEL 072-977-3100

株式会社酒井鉄工所  
酒井 芳申

株式会社関西宮城  
熱・吸音・遮音  
ロックウール・グラスウール  
大阪府都島区東野田町四丁目二十一  
TEL 06-6351-5071

赤帽  
板谷 運送店  
一般小口運送お受致します。  
ワンルームマンション小口引越  
しお取り扱致します。  
東大阪市瓜生堂二丁目八 一〇  
TEL 072-561-5587  
携帯電話 090-3813-8995

総合建設工事設計・施工  
オリオン工業株式会社  
一級建築士事務所  
代表取締役 樋上 雅一  
一級建築士  
〒534  
0025 大阪府都島区片町一丁目四番十二号  
TEL 06-6553-5252 FAX 06-6557-5354  
〒277 0802 千葉県柏市船戸一六五三-1  
TEL 0476-321-2400 FAX 0476-321-2498

正成は清忠から帝のご命令を聞かされるや、耳を疑った。  
 「清忠殿、それでは主上(おかみ)は叡山には...」  
 「行かれませぬ。それどころか、斯くも弱気な発言者は誰じゃと大層御立腹であらっしゃいました。」  
 「では今一度確認いたすが、現在京を警護する我ら楠木、和田(にぎた)兄弟の僅か一千の兵にて、戦支度もほどほどに兵庫に赴き、新將軍、尊氏の水軍の上陸を阻止せよ、と言われるのか?それが勅命(ちよくめい) 天皇直々の命令(な)なのでござるか?」  
 「それが勅命でござる。但し賊將尊氏の上陸阻止と言いましてもな、官軍の殿軍(しんがり)が西宮を通過するまでの一時を稼ぐだけじゃ。一千の兵もあれば、それくらいはできよう。良いか、陛下のご恩に報いる為にも、ご一族の生命に代えて官軍を可能な限り無傷で京に戻す、これが貴殿らの『使命』なのでござる。分かったなら、即刻戦支度を整え、兵庫に立たれよ。」  
 「承知仕った。大御心を漏れ承り、正成目が覚めてござる。清忠殿の仰せは尤もなり。我ら命に代えて、その使命必ずや果たして参らん。主上にご安心召されとお伝えあれ。」

### 感涙の場面「桜井の別れ」の真相は

楠木正成と弟、和田(にぎた)正季(まさすえ)は慌ただしく戦の用意をすませ、約千名の一族の者を引き連れ、京を立てて西国街道を西に進んだ。急ぐ出征ではあったが、摂津の国に入るや、桂川北岸を進む西国街道から桂川、淀川を渡って東高野街道へと分岐する桜井の駅(道駅 大阪府島本町)に宿営する。その夜正成は、この戦にこれほどの人数は要らぬと論したり、聞き分けない者には厳命してでも、年若き者五百名ばかり選んで夜が明ければ南河内に帰すことにした。ともに兵庫に赴く者は誰一人生きて故郷に戻れないだろうと予感していた正成には、一族の全員を死出の道連れにするのは忍びなかったのだ。

「太平記」には、ここで正成が11歳の長子、正行(まさつら)との別れを惜しむ場面がある。ともに戦場に赴きたいとせがむ息子に正成は、既に父は討死を覚悟せり、息子のお前は生き長らえ、いつの日か忠君の志を継いで賊を討て、それが何よりの親孝行ぞ、と論すところの太平記中一番の感涙の場面「桜井の別れ」である。また戦前、多数の国民から愛唱された以下の明治の国文学者、落合直文の詞による「大楠公 去、このエピソードを哀傷の感をこめて歌っている。

一、青葉茂れる桜井の 里のわたりの夕まぐれ  
 木(こ)の下蔭に駒とめて 世の行く末をつくづく  
 偲ぶ鎧の袖の上(え)に 散るは涙かはた露か  
 二、正成涙をうち払い 我が子正行呼び寄せて  
 父は兵庫に赴かん 彼方の地にて討死せん  
 汝はここまで来つれども とくどく帰れ故郷へ

だがこの父子の別れが果たして史実かどうかは不明である。太平記以外にこのことを記した資料は何ひとつない。常識的に見て、このような不穏な世時に正成が、僅か11歳の嫡男を伴い京都の警護にあたったとは考えにくい。十年後、成人した正行(まさつら)が見事一族を再興し、吉野に立て籠られる南朝の天皇(後村上天皇。顕家が奥州に奉じた義良親王のこと)にお味方し、一時は足利軍を相手に東高野街道各地で目覚ましい戦

果を現わすのだが、最後は父と同じく天皇方に若き生命を捧げている。思うにそれこそ語り継ぐべき忠君の史実なりと、太平記の作者は、目に見える形で父から子へとメッセージをつなぐ虚構を用いても、十年後の正行登場を盛り上げる伏線を、父の死の直前に引いておきたかったのではないだろうか。

では、急ぐ出征の途上、何故桜井駅で宿営したのだろう。最も信じられる説は、正成が自らの戦死を予感して、導師であった河内長野、勸心寺の滝覚房に相談することあって、桜井駅を待ち合わせの場にしたいという先だ。正成は御房に、勸心寺に普請しようとした三重の塔が遂に完成できなかったことを詫び、代わりに後醍醐天皇から拝領した愛染明王木像を寄進し、この後、勅命とはいえ新將軍と正面切って争って討ち死にすれば、城も領地も没収されて途方に暮れるであろう残された妻子や一族の者たちを、御房のお力で助けていただければと、涙ながらに懇願したのではなかったか。

翌朝、降りきる雨の中、故郷に戻る者たちに老僧の滝覚あるいは嫡男正行を南の金剛山麓まで送らせ、残る五百余名の楠木和田勢は更に西への進軍を続行する。騎馬兵も歩兵も全員が片手に槍を持ち、逆の腕には馬防ぎの戸板を抱えての往時では奇妙な形態の進軍だった。だが降り止まぬ雨で思うに進めず、摂津尼崎で宿営することに。目前を流れる武庫川の対岸は既に敵赤松が支配する地である。時に5月23日の夕。



桜井の駅跡(三島郡島本町)

### 正成、玉砕を望む義貞を諫め、退却を決意させる

楠木・和田(にぎた)軍が六甲、摩耶の摂津赤松勢の挑発を無視しながら灘を通過し、兵庫に到着したのは、雨も上がった明るく24日の夕刻であった。正成は西の空に茜色に染まり出した雲の下の海岸線に目をやり、思わず合掌をする。新田軍が、尊氏軍より先直義軍より先に兵庫に到着した模様で、丸に一文字の大黒(おおくろ)の無数の軍旗が、生田の森から和田岬まで平和に翻っていたからだ。

これでどうやら、むざむざ一族の者を死なせなくともよいやもしれぬと神仏に感謝しながら正成は、官軍総大将の義貞に会見を申し入れた。

義貞は苦笑いしてこう述べる。我らを寝返った者たちが加わった敵軍は膨らみ過ぎて、皮肉にも寡兵(かへい)になって動きやすい我らには追いつけず、お蔭で直義軍より先、尊氏の水軍より先、一足先に兵庫に到着できたのだと。

だが直ちに全軍率いて京に戻れ、という帝のご命令はきけぬと義貞は言う。目前の敵の大將、尊氏に一矢(いっし)先報いず、

敵に背を向け退却するなど、この義貞にどうしてでしょうか、ましてその為に盟友楠木を盾に使うなど、新田の名誉はまる潰れであり、できる相談ではない、と武家らしく反駁(はんぱく)する。

「では尋ねるが、御大將が上陸する敵軍に一矢も二矢も報いられるは良いとして、一方の直義(ただよし)の騎馬軍は今どこにおりますのじゃ?...もしや、直義軍も明日にはこの浜にやって来るのでは?...新田殿...もしや貴殿、明日は死ぬ気でおられるのか?」

「察しが良い貴殿ならば正直に申そう。天皇方をかくも窮地に陥れたは、すべてこの義貞の責めでござれば、このまま主上に会わせる顔もなく、一族の生命を捧げることで敵將尊氏あるいは宮様(護良親王)の敵、直義と相討ちができるなら、それこそ義貞の本望でござる。それに...。」

「それに? 新田殿、正直に存念をお聞かせあれ。」

「世が変わり申した。今や皇恩に感謝する者はなく、代わって足利を支持する者が地に満ちておる。無駄に生き長らえ、世の浅ましい行く末は見たくない。もし天子様に武家の恩賞や領地への執着に対し今少しのご理解があったれば...。」

「それは間違いでござる。なる程、足利は武家たちの我欲、物欲に答えるのが上手でござる。だが物欲はいくら求め得ても際限がない。物や財は有るように見えて幻の如きもの、この世は人や物ではなく、神仏の御心が創りしもの、と勤心寺の老僧も申してござる。よって人の物欲を集めてまともな国などできる筈がござらぬ。我らは尊氏と戦うのではなく、物欲で人を操ろうとする思想、国を私する思想と戦うのでござる。長い戦いになる。我らの代では終わらず、子から孫へと続く戦いになるやもしれませぬ。民がその中心者に帰一する心を持って始めて、国は『国』たりするのでござる。生きる方が死ぬよりも辛く、勇気がいることもござる。今貴殿は主上の為に正義の為に生きなければならぬ。だから新田殿、生命を粗末になさるな。正義は勝たねばならぬのでござる。」

「さて、我ら敵の上陸を前にして、一矢も報いずにこの地を立ち去ることなどでせぬ。」

「承知いたしました。新田殿は明日、貴殿の弓隊をこの浜に並べられ、存分に敵の上陸を阻止されるが良からう。ただし矢が尽きたその時は、速やかに全軍率いて京に退却なさることをお約束いただきたいのじゃ。」

「委細承知。して貴殿らは?」

「これよりより越え下の会下(えげ)山に陣を張り、菊水の軍旗を何百と並べて直義軍を引きつけるでござる。御安心あれ、貴殿らが京に向けて出立なさるまで、直義軍にも、上陸軍にも湊川の川原からは一歩も東に行かせませぬ。」

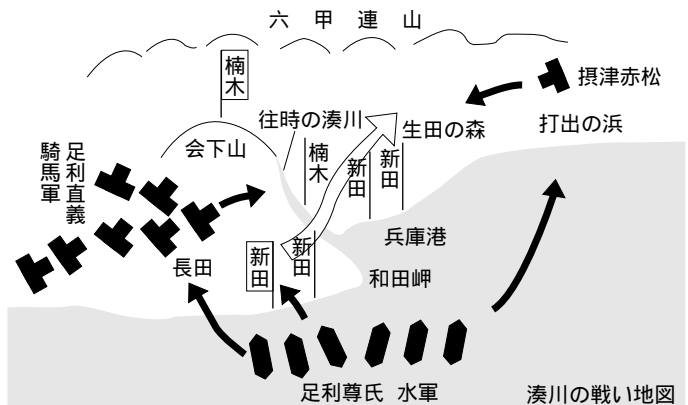
## 我ら、使命をはたしてござる

1336年5月25日(現在の7月初)早朝から兵庫の沖は真黒になる程、上陸の機会を伺う軍船でいっぱいとなった。須磨浦方面からも雲蚊のごとく進軍してきた直義配下の騎馬兵らが、菊水の旗の林立する会下山を十重二十重に取り囲んだ。だが会下

山の陣には正成以下騎馬兵らが百名ほどいるだけだ。正成は歩兵を密かに東の湊川に移動させていた。彼らは川原に戸板を並べ、その蔭で槍を構えて隠れていた。

戦端はまず和田岬で切って落とされた。打ち寄せる波の如く、尊氏軍の上陸は何度も試みられた。だが浜を守備する新田軍の雨霞のように射かける矢に、浜に漕ぎ寄せる者らは残らず負傷し、海中に投げ出されて溺死した。船上の人も馬も海中に没し、漕ぎ手の無い船が無数に海浜両軍の眼前を漂った。尊氏は意にも介さぬ如く、上陸命令を繰り返した。

しかし新田軍が矢を射尽すのに、それほど時間を要しなかった。東を見れば、摂津赤松勢が退路を拒み、灘の浜では細川勢など足利与党が続々と上陸し始める。官軍2万の総大将、義貞は、しばらく天をにらんだ後に、大音声(だいおんじょう)にて、敵中突破し、京への全軍退却を命じた。



新田軍が東に動くのを見た直義軍は、慌てて会下山の囲みを解き、急ぎ後を追って湊川を渡ろうとした。川原には縄で結ばれた奇妙な戸板が並んでいる。その前で騎馬兵が一旦踏み止まれば、飛び出す楠木兵に槍で突かれて落馬し、何百何千と絶命した。湊川の川原も瞬間に凄惨な戦場となった。

囲みを解かれた正成ら会下山の楠木騎馬軍は、今こそ好機と敵中を駆け抜け、蓮池の直義本陣に切り込んだ。直義は生命からがら須磨まで逃げた。直義を取り逃がした正成は、次に長田に上陸した尊氏の本陣にも斬り込んだ。未曾有の大軍を率いる武家方の総大将、足利尊氏も肝を冷やす場面があったのだ。

このようにしてその日も陽が傾き始めた。炎天下に敵と干戈(かんか)を交えること二刻(4時間)に及び、満身創痍の正成、正季兄弟は走れぬ馬を乗り捨て、湊川の戦場によくやくたどり着けば、生き残っている味方は73名。さらに半時(1時間)獅子奮迅に戦って、もはやこれまでと正成は目立たぬ廃屋を見つけ、屋根に火を放った後に、その中で弟正季と差し違えて自害した。26名の一族の者たちも、正成兄弟を追うようにその場で自害する。全員、勅命による使命を果たし得た満足感に充ちていた。正成も息を引き取る際に、きつこうつぶやいたであろう。

「陛下、我ら、使命を果たしてござる。」

楠木正成、享年43歳であった。

(完)

一年半の長きに渡って拙作をお読みいただいた皆様に深く感謝いたします。東高野街道の物語はまだまだ続きますが、同じ時代ばかりを探訪する訳にも行かず、このあたりで一区切りをつけましょう。皆様から感想をいただければ幸いです。(郵便は事務局宛、メールはtai ra@noseh.com)

次回の予告 エピソード-9「神武天皇上陸の地-石切」